

福音のヒント ラテラン教会の献堂(2008/11/9 ヨハネ 2 章 13-22 節)

教会暦と聖書の流れ

ラテラン教会とは、紀元 4 世紀にコンスタンティヌス皇帝によって建てられた、ローマにある教会のことです。14 世紀までローマ司教(教皇)の司教座聖堂として用いられ、すべての教会の母とされてきました。ちなみにバチカンの聖ペトロ大聖堂は 14 世紀末からローマの司教座聖堂となりました。全世界の教会で祝われる「ラテラン教会の献堂」の祝日は、カトリック教会の一致のかなめであるローマの教会とのつながりを思い起こす日なのです。

福音の箇所は、B 年四旬節第 3 主日にも読まれる箇所です。石造りの神殿ではなく、ほんとうに神が住まわれるところはどこかを問いかける箇所です。

福音のヒント

(1) 牛や羊や鳩は神殿でいけにえとしてささげられる動物でした。また、神殿への献金のためには、当時流通していたギリシアやローマの貨幣が使えないので、イスラエルの伝統的な貨幣に交換してもらう必要もありました。これらの商売は神殿での祭儀や礼拝のために必要なものでした。イエスはなぜこの商売を妨害しようとしたのでしょうか。



この出来事はヨハネ福音書ではイエスの活動の初期に起こったこととして伝えられています。マタイ、マルコ、ルカ福音書では生涯の最後のほうに置かれています。3つの福音書には、「わたしの家は、すべての国の人の祈りの家と呼ばれるべきである」というイザヤ 56章7節の言葉が引用されています(マルコ11章17節など)。イエスにとって神殿は純粹に「祈りの家」であるべきだったので商売を否定したということでしょうか。だとしたら神殿そのものは否定されていないということになります。ヨハネ福音書でも詩編69章10節を引用した「あなたの家を思う熱意がわたしを食い尽くす」という言葉が伝えられています。これは「あなたの家(神殿)に対する熱心さでわたしの心はいっぱいになっている」という意味です。少なくとも周囲の人々には、イエスが神殿を大切にしようとしていると見えたのでしょう。

(2) しかし、ヨハネ福音書では、神殿そのものが過去のものになっていて、イエスと共に新しい時代が始まっている、という面が大切です。この意味で、2章1-11節のガリラヤのカナでの婚宴の話と対(つい)になっています。そこでは古い時代の象徴である「清めの水」が新しい時代の象徴である「ぶどう酒」に変えられました。エルサレムの神殿は実際には紀元70年にローマ軍によって破壊されます。イエスの死から40年ほど後のことですが、ヨ

ハネ福音書が書かれた時代から見れば、過去の出来事です。そしてヨハネ福音書は、イエスが登場したとき、もうすでに石造りの神殿の時代は終わったのだと見ているのです。

ヨハネ福音書は奇跡のことを「しるし」と言います(2章11節参照)。奇跡は単なる不思議な出来事ではなく、イエスとはどういう方かを表す「しるし」なのです。「どんなしるしをわたしたちに見せるつもりか」(18節)という問いに答えてイエスが話した「三日で建て直される神殿」とは「死んで三日目に復活するイエスの体」のことです。究極のしるしは「イエスの死と復活」だと言うことができます。そこでこそ、イエスとはどういう方かが明らかにされるからです。神殿の本来の意味は「神がそこに住まい、人が神と出会う場」です。イエスという方において、特に死んで復活したイエスという方において、神は人と共におられ、人は神に出会うことができる。わたしたちもこの新しい時代に生きています。

(3) ヨハネが伝えるイエスの言葉「わたしの父の家を商売の家としてはならない」(16節)の背景には、ゼカリヤ書の結びにある「その日には、万軍の主の神殿にもはや商人はいなくなる」(14章21節)という言葉があるのかもしれませんが。「その日」は救いの完成の日です。なぜ、その日には神殿から商人の姿がなくなるのでしょうか。ゼカリヤ書は直前でこう言います。「(その日には、)エルサレムとユダの鍋(なべ)もすべて万軍の主に聖別されたものとなり、いけにえをささげようとする者は皆やって来て、それを取り、それで肉を煮る」(14章21節)。「鍋」は日常生活の象徴です。その日には、日常生活のすべてが聖化されるので、もはやエルサレムの神殿で行なわれるいけにえの儀式は必要がなくなる、だからいけにえの動物を売る商人もいなくなる、つまり日々の生活そのものが神との出会いの場になるという預言だと考えられます。これもイエスによって始まった新しい時代の特徴です。わたしたちは日々の生活の中でこのことを感じるのでしょうか。

(4) 石造りの神殿が否定され、死んで復活したイエスこそが神の住まいとなる。日常生活のすべてが神との出会いの場となる。だとしたら教会とは何でしょうか？

「教会献堂」とは、実は本来、建物の落成記念という意味ではありません。「教会」はギリシア語では「エクレーシアekklesia = 呼び集められたもの」です。大切なのは、そこに神によって呼び集められたキリスト者の共同体が始まっている、あるいは育っているということなのです。この信仰共同体としての教会に「目に見えない神との出会いの場となる」という使命が与えられています。教会そのものが「秘跡、すなわち、目に見えない神の恵みの目に見えるしるし」であるということもできます。わたしたちの教会は3つの活動をとおしてこの使命を果たしていきます。1) 共に賛美と感謝をささげること、2) キリストの福音を告げること、3) すべての人を兄弟姉妹として大切にすること。

この使命を考える時、わたしたちはいつも弱さを痛感するかもしれません。教会はあまりにも人間的な限界を持っているからです。しかし、全世界の教会のネットワークや2000年の豊かな伝統がわたしたちを励ましてくれることも大切です。わたしたちの信仰共同体は、決して個々バラバラの、孤立無援の共同体ではないのです。